

平成16年度第3回 高知県人権教育推進協議会 協議まとめ

日時 平成17年2月23日(水)

13:30～16:30

場所 高知会館 3階 飛鳥の間

1 開会

- (1) あいさつ
- (2) 日程説明

2 報告

- (1) 高知県人権教育推進プランの見直しについて
- (2) 「女性の人権」にかかわる現状と教育の取組
「女性の人権」にかかわる現状と課題解決の取組
教育における取組の報告

- (3) 質疑応答

高知の男性の年代別の意識の変化についての資料はないか。世代による意識の違いを教えてください。

男女共同参画・NPO課

「例えば男女平等意識を家庭生活で年代別に見ると、『男性の方が優遇されている』という割合は、20代で約50%、これに対して40代では約60.9%、50代であれば約61.8%、70代以上になると約40%と言う風に、年代によってもかなり開きがあります。」

意識は各項目共通していないか。

男女共同参画・NPO課

「意識が一番高いのが40代、50代それから30代で、若くなると無関心層が多くなっています。」

男女混合名簿は、平成18年度に100%を目指していたが、今度の見直しでは取組が後退しているという心配がある。目標数字は入れない計画なのか。

人権教育課

「男女混合名簿については3年に一度調査をしており、その結果、確実に実施校は増えてきています。今後、100%を目指していくという考え方は変わりはないが、実施にあたっては教職員間、子ども、保護者とも十分な検討をしていただく事を重視しながらモニタリング値として、その推移を検証していくことにしています。」

3点お聞きする。卒業証書を渡す時に、男子から渡すという現状がないか。資料の説明で、女性の人権や男女平等についての回答の中で中学生が数値が低かったが、どうしてなのか。配偶者等に暴力をふるう人と、子どもに虐待をしている人は重なっていないか。

人権教育課

「卒業生台帳が混合になっていれば、呼び出しが混合になっていると思います。その数値は、公立の幼稚園が50%、小学校が36.2%、中学校が21%、高等学校が67.2%盲聾養護学校が92.3%というような数値になっています。

中学生での学習をしたという答えの割合が少ないのはなぜかということですが、小学校では男女一緒に学習をしていたものが中学生になると発達段階もあり、体育の授業など男女が分かれて活動する部分が増えてくると、子ども達が答えているように学習が少ないことも事実としてあるのではないかと考えています。」

フェミニストカウンセリングという民間団体のデータでは、DVのある家庭では子どもへの暴力が半数の家庭で起きていることが認められた。それは身体的暴力を伴う子どもへの虐待である。また、夫婦のDVを見続ける事自体が子どもへの虐待である。その影響というのは、計りしれないほど深刻で暴力を見続ける事で男の子は、自分のパートナーに対して相手を意のままに動かすには暴力をふるってもいいと学習してしまう。一方で我慢しているお母さんを見続けることで、女の子は少々暴力を振るわれても我慢しなくてはいけないということを学んでしまう。だから自分が親になったときに無意識のうちに同じ事を繰り返す可能性も出てくる。その可能性はDVのない家庭から比べると高い。

保育現場でも男女平等教育の充実が必要だ。私の勤務する保育所では、性別によって色や絵を決めるのではなく、色紙やカラー紙から自分の好きな色を選んで、下駄箱や持ち物のシールを決めている。多くの保育者や教師は、自分の内面にある男女の固定的な位置づけが克服できていない。このことを克服していくためには、本当に県が力をいれて啓発する、県民にアピールする研修会を持つ必要がある。

【高知県人権教育推進プラン「人権教育のすすめ(改訂版)」の見直しについて】

一番下の2行目『人権を守り、学力と進路のためにも』という文面になっているが、園と所が入ることになると、言葉がものたりない。幼稚園であれば教育そのままでもいいが、保育所となると教育そのものではないので、何か言葉を入れた方がいいのではないか。」

人権教育課

「就学前教育では人権保育という言葉もありますが、それを含めて人権教育という言葉で統一しようと考えています。」

私は、幼稚園であれ保育所であれ、人間形成にかかわるすべてが教育だと思っている。幼稚園が教育で、保育園が子守という考え方ではなく、幼保一元化で全国に先駆けて教育委員会の管轄下に保育所が入った高知県であれば、やはり前進的なことで考えてほしいし、保育所を旧態依然の捉え方ではなく、教育という分野での保育内容の創造として取組を進めてもらいたい。

学校教育、社会教育、地域ぐるみ教育とあって、家庭教育がない。なぜないのか。

人権教育課

「家庭教育については、『社会教育』と『地域ぐるみ教育』の中に含めて考えています。」

3 協議

テーマ「男女平等を基本とした教育をどのように進めるか」

全国高等学校PTA連合会で、性意識調査というのを全国で初めて、1万人の高校生を対象に実施した。結果を見ると、女子高校生のほうがものすごく性に関する意識は強い。反して、男子高校生のほうが非常に意識が低い。しかし、最終的に性経験に至るときには、男子優先、男子主導という結果が出ている。「ノー」と言えない女の子。女の子は我慢するとか、いやと言えないとかということが、いつの間にか培われているのではないか。

男子は男子、女子は女子の性の意識を持たせる教育をすることによって、男女共同参画、男女平等という意識が生まれていくと考える。小・中・高の連携をしっかりと取りながら、性教育に関して学校と家庭と地域を巻き込んだ取り組みが必要だ。

私は、今PTAの代表で内閣府の男女共同参画のグループに入っている。各種の調査結果から、家事に関して女性のほうがかかわる比率が非常に高いことがわかる。ところが世界的に見ると、外国はそうではない。家事も育児もきちんと夫婦の問題であり、親として責任を果たしている。これが性の問題に非常に大きく関わっていると、調査結果から分かった。それによると、会話、日常の会話がきちんと行われている子どもは、性経験が遅い。

私は、母が26才、私が2才のときから1人親家庭だった。母が私に立派な、自分の夫のような人間になってもらいたいと思ったのか、よく「そんなことしたらいかん、女の腐ったみたいなことしなさんな。」と、ずっと言われた。それから近所でままごと遊びするときも、「ちゃんはお父さんだから、ここできちっと座っちゃきなさい。」といわれ、ままごとをさせてくれませんでした。私はそういう家庭で育ってきたから、女性に対する差別意識があった。教師になったときも、妻と生活して、私がスーパー行こうとしたら、母は「男の子がスーパーへ行くな。」と。こういう固定観念をこわす、概念砕きが必要だ。男とか女とかいうことでなく、人間というものから考えなくてはならない。

今、コミュニケーションというものが社会全体不足しているからいろんな問題が起きているとよく言われる。それは男女についてもやはり同じだ。コミュニケーション力の差が、実は男女で3倍違う。女性のほうが3倍コミュニケーション力が高い。ところが、そのことがまったく認識されていない。男性も女性もお互いを同じだと思っている。もっと早く高校の段階で、こういったことが分かっていたら、お互いに相手の話を聞くとか、どうすれば相手への気持ちに共感出来るかとか、考えるのではないか。

今、結婚できない男性が非常に増えて問題になっている。男性のほうは、結婚したいがために花婿学校のようなところに一生懸命通って、コミュニケーションも学んでる。出会いの場所が少ないというのもあるが、出会ってから以降、うまくコミュニケーションが取れないから、結婚まで行かない。結果的に結婚出来ない方が非常に増えてるということが問題になっている。

そういった意味で、学校教育、社会教育、どちらにおいても、男女のコミュニケーションの教育というものがなされれば、どちらにとってもいい状況が生まれてくるのではないか。

例えば学校で、男女の立場を逆転して、男の子が女の子、女の子は男の子、お父さんやお母さんの立場でロールプレイの授業をして、話し合っていてはどうか。

ジェンダーについての保育内容を系統的に積み上げている保育園が、須崎市にある。私の保育園でも、母体にいる時から子どもに語りかけるとか、乳幼児期のときから子どもが認められ、子どもがしゃべりたくなる、思いを語りたくなるような、家庭環境・保育所環境を作ることに取り組んでいる。自尊感情をもち、堂々と自分のことを表現していく子どもを乳幼児期から育てていく保育内容の構築をめざしている。

先日、DVの被害者の方と会って話をする機会があった。4時間話をした。私は、一言もしゃべらなかった。4時間ずっとただ黙って聞いていた。彼女が言うには、自尊感情をもっていないと言う。被害者の方が、ほとんど共通したことを言う。自分は小さいときからそれが培われてこなかった。だから今こういう状態になるまで自分は我慢をし続け、今初めて気がついた。

人は、自分の体のこと知ることが原点だと思う。体を知る、あるいは性教育をきちんと子どもたちに伝えていく。さらにもっと考えるのであれば、人間の体の仕組みはどんなふうに出ていて、その生命体だから、この体をどういうふうにしていくか、そして命があるわけだから、この命を自分で守るということはどういうことなのか。それを考えていくと、自分の命を守る、人の命をどう守るかということにつながっていくと思う。

「ちびゴリラのちびちび」という絵本がある。小さいゴリラが生まれてからそのゴリラをみんな大好きですってという繰り返しの話だ。コンビニの前で夜間もずっと座っている子どもたちやゲームセンターから帰らない女の子たちに読み聞かせをしている人がいる。間違いなくどの子も好きってというのが、その「ちびゴリラのちびちび」で、一番人気だそうだ。子どもたちは、大好きって言われることに飢えている。大事にされる、安心する、安心して生きていけるという状況が、どの子にも保障されているか、それを子どもたちが感じているということはすごく育ちの中で大事なことだと思う。形にこだわるということではなく、隠れたカリキュラムと言われている、いつでも男生徒が先、いつでも女生徒が後。そういうことが定着してしまうという心配がある。混合名簿も、形と言われればそうかもしれないが、深い意味がある。しかし、社会の改革を急激にやると無理が生じるから、可能な範囲で順に進めていかなければいけない課題である。

確かに意識改革のうえでは、形を作って制度を作って改革していく方法も必要だが、ほんとの教育はそういうものではない。形式にこだわる。この協議会もそうだ。女性を何人入れなさい。数をそろえたらいいという問題ではない。

高知県の調査結果を見ると、家庭での役割分担では、共同で家事、育児している人の数が増えている。あるいは、夫と妻の役割を固定しない人が、増えている。それと、満足度では、全体的には73.8%、女性は、63.8%が役割分担に満足していると答え

ている。この調査結果は、本当に男女共同参画を表していることなのか疑問に思う。たとえば、家事分業についても、一人一人がその暮らしのなかでどれだけ幸せに思っているかということ、どういうふうに計っていくのかが、大切ではないか。家族、あるいはパートナーの中でどんなコミュニケーションをとりながら幸せを作っていくのかということが、すごく大事なのではないか。

一人一人の幸せの指標はそれぞれである。男女に関わらず、自分がどのように生きていかに妨げる権利は誰にもない。お互いが認め合うことを大切にする、男のくせにと女のかくせにとする否定的な考えをなくしていく教育をしなければならない。男女関係なく、どう生きていのかをお互いに自覚しあう、見つけていく学校教育をしてほしい。

心理学的に言えば、差別の本質というものは、コミュニケーションを切断をすることである。だから夫婦生活の中でも、コミュニケーションがないということは、そこに差別の芽が生まれるのではないか。「お母さん、この花きれいだね」と言ったとき、「そうだね、きれいだね」というコミュニケーション。心を通わすと、美しいものを美しいと感じ取り、あるいは作り出すという心が育っていくし、人の温かみややさしさとか人情の機微とか、一緒に育ってくると思う。そういう中で、「お母さん、あれきれいだね」と言ったときに「ほんとにきれいなね」といわずに「きれいなこと分かっちゃあね。はよう宿題しなさい」と、コミュニケーションを切断をしてはいないか。

人のためにやってあげているという気持ちでは、きつとうまくいかない。なんにしても、これは自分にとって楽しい、プラスに捉える側面を大事にしたいと思っている。今、社会教育における人権学習の教材作りをやっている。そこでいつもみんなが大事にしているのは、教材を使う担当者が、共に育とうという共育だ。担当者も地域の人と一緒に学んでいくということをお願いしていく。学校教育では、先生が人権教育となると教えなくてはならないと、身構えてしまっているところがあるのではないか。そうではなく、先生もこの地域に暮らしている一人の人間として見たときに、教室の子どもたちとの日々の接し方にすごく大事な部分がある。子どもと話す、コミュニケーションするところで、ものすごく大切なポイントが実はいっぱいあることに気づいて欲しい。そういうところに気づいて、学校の先生も共に育つという共育のあり方を考えていただくとずいぶん変わってくるのではと、僕は期待をしている。

中学校、高校に上がる時、学生服がある。学生服は男女で違う。学生服もいい、私服もいいと日があれば、一人一人の個性が見れていいと思う。

混合名簿を考えた時、体育の授業は男女は高校になったら違って来る。その時、2つの名簿を作る問題が出てくる。集会で体育館へ集まると、男女混合だと190センチの男子の後へ150センチの女生徒が来たときに、隠れて見えなくなる。それよりも、女生徒を並ばせて、男子生徒を並ばすほうが、話が通りやすいし、子ども一人一人の顔が見える。それから、学生服にしても男にとっては機能的だし、女性にとってはスカート、これはズボンになってもいいが、制服は違ったほうがいい。性差があることを学校教育の中で教えなければならないし、性教育にも結びついていく。一人一人を大

事にしていく、思いやりを持って生活していく、男には男の性、女には女の性があることを学校教育の中できちっと教えていくべきだ。一緒にすることによって、どれだけのメリットがあるのか、何を別にして、何を一緒にしていくかということを考えていかななくてはならない。

保育であれ、小学であれ高校であれ大学であれ、子どもにとってどういうことが一番大事なのかに視点を当てて考えていくべき。大人側が便宜上やるのが、少々手間隙かかっても、子どもにとって何がいいのかということを考えていくべきではないか。以前こうだったから今もこれでいいではないと思う。

子育て支援の活動に携って感じることは、講演会を催しても、男性の参加が少ないことだ。女性が子育ての中心といった責任感を大きく背負っていると思うのだが、母親は少しでもよい子育てをするためにはどうすればいいかという意識を持っている。男性の方も、子育てに協力したいという方も増えつつあるが、勉強会や話し合いになると苦手なようだ。けれど子どもを育てていく中で、発達段階や今の現状を知るとはとても大切なことだ。急に不登校になったり、子どもがいじめを شدしたという現象が現れてから動くのではなく、こうなりうる可能性があるから、事前にどういがかかりをしていこう。そういうやり取りが本当に日常的に行われているだろうか。

来月からPTAで心のポストというのをはじめる。学校は慎重になって、子どもの守秘義務であるとか、家庭内のことや担任のことも出てくるかもしれないので、不安があったようだ。繰り返し職員会議などに参加させてもらい、気持ちを伝えて、来月かできるようになった。今の子どもたちを見ていると、本当に自分の問題意識とか悩みとかしんどい気持ちを話できているだろうか。それを言葉に出来ないままに、暴力的な言動や行動になったりする。低学年でも、馬鹿とかいう言葉が大変多い。心のはけ口としてその言葉を使ってしまう子どもの気持ちのほうを先に汲み取ろうと話をするのだが、意識のずれがある。注意が先に立って、子どもの気持ちが後回しになっている。夫婦も子どもも良好な人間関係作りを普段から培えるような、そういう土壌を作っていきたいと思っている。

生徒と教師、その信頼関係というのが出来ているのか。それがあって初めて教育や指導が生きてくる。だから道徳の時間とか、人権教育の時間だけで、人間関係づくりや人権にかかわる学習や活動をしてもらっては困る。先生や親が、普段の生活で子どもに対して人を大切に作る言動をしていなければ、子どもは大人を信頼しない。もちろん自分自身の反省も含めて。自分の勤務する学校も実は男女混合名簿をしている。名簿は男女混合、集会のときは男女別で並んでいる。何の違和感もない。ただ男女混合名簿をしているから人権教育をしているになっては困る。そうではない。だからこれからの教育の中で、人権教育という、人間教育の根本にあるものを身につけるべきだ。これは教師も、子どもたちもみんな一緒だ。

一言で言えば形にこだわらず、教師は教師、保護者は保護者が人権尊重ということを実践に移す。生き様を、それぞれが教えていくようなムード、環境作りが一番大事ではないか。もっと積極的に、お互いがコミュニケーションをとってやっていくことが必要だ。